加藤 源重（げんじゅう）

1935年9月25日、愛知県岡崎市生まれ。自助具製作の「福祉工房あいち」代表。三重大学非常勤講師。その他、早稲田大学、愛知産業大学など多数の大学、福祉関係団体、企業研修など年間約40件の講演依頼がある。著書に『障害を乗り越え発明人生「傷の手」は宝』(太陽堂)、『自由への補助具』(本の森)、『障害を乗り越え発明人生』(創栄)、『三河のエジソン』(佼成)がある。科学技術長官賞、特許庁長官奨励賞、東久邇宮記念賞など他54の賞を受賞。

源重さんは、幼少より鍛冶屋として農機具を製作する父の背中を見て育ちました。その影響か中学卒業後すぐに旋盤や溶接技術を習得し、やがて岡崎市の紡績会社に機械設備担当として就職します。源重さんのその後の人生を大きく変えることになる大事故が起こったのは、1991年春、56歳のときでした。仕事中に機械に右手を巻き込まれ、大けがを負ってしまったのです。

病院では右手をすべて切断すると言われました。こうしたけがの場合は、手首以下を切断するのが通例であったようです。しかしそのとき源重さんは、わずかでも残っていれば、その部分で何かできるはずだと、考えました。そして、ねばり強く医師に頼み、4本の指と手のひらの大半を失ったものの、親指のつけ根1センチほどを残すことができました。

事故後の生活で「右手で箸を使って食事をしたい。」という夢がありました。しかし、指のない手で箸を使うという発想には、だれも見向きもしてくれません。慣れない左手で図面をおこし、メーカーに製作を依頼しても、返ってくるのはいつも「不可能」という答えだけでした。それなら自分で作るしかない。これが自助具製作のきっかけとなりました。それからは、失敗の連続だったそうです。試行錯誤のすえに、ようやく不可能が可能になりました。

自助具第1号が完成して源重さんが得た信念とは、「絶対にあきらめないで何度でも挑戦すること」。その後、源重さんは障碍をもつひとのために多くの自助具を製作しています。一人ひとりの要望を大切にし、最後まであきらめないその真摯な姿は、わたしたちに不屈の精神と、ひとへの思いやりがいかに大切かを教えてくれます。

福祉工房あいち

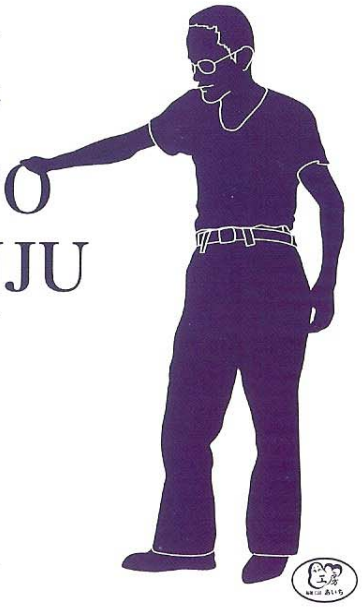
福祉工房あいちは、2000年1月、源重さんの自宅横にある作業場を拠点に、約50名の技術ボランティアグループとして発足しました。工房ができたのは、源重さんの活動がマスコミに取り上げられたことで全国からたくさんの注文が入るようになり、一人では十分に対応できなくなったからです。

自助具は使うひと、一人ひとりに合った使い勝手のよいものでなければなりません。障碍の程度はそれこそ千差万別です。増え続ける要望に答え、依頼者から十分なヒアリングをするためには、人手が必要でした。地元紙で「アイデアと技術を貸してください」と呼びかけ、福祉工房あいちがスタートしました。集まった仲間は、大工、溶接や旋盤の技術者など定年退職をした60代のひとたちが中心でした。自宅に工具や機械をもっているひともいますから、それぞれの知識と技術を生かし、製作をしています。

工房が大切にしていることは、何より依頼者とのコミュニケーションです。工房に足を運んでもらい、依頼者の状況を確認し調整を繰り返すことで、最良の自助具を製作してゆくのです。果敢に障碍に立ち向かうひとたちを、わたしたちは「生活挑戦者」と呼び、これからも応援していきます。

福祉工房
Welfare
Atelier
Aichi
あいち

加藤 KATO
源重 GENJU



Welcome to Welfare Atelier Aichi.
ようこそ、「福祉工房あいち」へ。